

お薬のしおり

うつ病とお薬

No.153 (H26.11)

東京医科大学病院 薬剤部

みなさんは「うつ病」という病気を耳にしたことはありますか？うつ病とは、強いうつ状態が長く続いて日常生活に支障を来してしまう病気です。みなさんも日常生活の中で、嫌なことがあったり気持ちが沈んでしまったりすることは経験があるかと思います。その時は気分が落ち込んでしまっても、一時的なものである場合が多く、その原因が解消されることで気持ちも回復することが多いはずです。このような場合は「うつ病」とは言いません。

ところが、うつ病の場合、強い憂うつ感が1週間、2週間と続くことがあり、主な症状は、精神的な症状（何をしても楽しくない、無気力、悪い方ばかり考える、イライラ感がつのるなど）や身体的な症状（倦怠感、食欲低下、不眠・夜中や早朝に目が覚めるなどの睡眠障害、頭痛など）が挙げられます。

うつ病の原因は様々で、ストレス、環境の変化、プレッシャーや不安、苦しみ、悲しみなどがあり、複数の要因が複雑にからみあって引き起こされることもあります。また、糖尿病や高血圧といった生活習慣病、更年期障害、脳梗塞などの脳血管障害、パーキンソン病など様々な疾患に合併することが多いことも知られています。血液検査や画像検査などでは診断できないため、医師と患者さんあるいは家族などの周囲の方との面接、問診から得られた情報をもとに診断します。

では、うつ病の治療は具体的にどのように行われるのでしょうか？うつ病の基本的な治療は、休養と十分な睡眠と適切な薬の服用です。治療経過に応じて認知行動療法、対人関係療法などの心理・精神療法を用いることもあります。認知行動療法とは、別の考え方ができないかを探る方法で、対人関係療法とは、患者さん同士で定期的に集まり、医師の立会いのもとで他人とのコミュニケーション能力を高める練習などがあります。

うつ病の様々な症状は、脳の中で気分や意欲に関わる働きをする神経伝達物質（セロトニン・ノルアドレナリンなど）の量が少なくなることで起こると考えられています。よって、うつ病の治



療に使用されるお薬は、これらの神経伝達物質のバランスを調整する働きがあり、お薬の化学構造式の分類によって以下のように分類されます。(カッコ内は当院採用の商品名)

●三環系 (トリプタノール、アフラニール、トフラニール、アミタリ) ●四環系 (ルゾロン、テラミド) :

お薬の化学構造に亀の甲の環を3つ持つものを三環系、4つ持つものを四環系と呼び、セロトニンやノルアドレナリンなどの神経伝達物質がもとの神経細胞に再び取り込まれるのを阻害して、神経伝達物質の量を正常に近い状態に戻します。しかし、うつ病とは関係のない受容体にも作用してしまうことにより、口渇や便秘、排尿困難、眠気などといった副作用が出る場合があります。

●SSRI (選択的セロトニン再取り込み阻害薬) (パキシルCR、ゾロフト、リサプロ、ルボックス) ●SNRI (セロトニン・ノルアドレナリン再取り込み阻害薬) (サインバルタ、トドミン) :

SSRI は主にセロトニン系の神経に選択的に作用して、セロトニン神経伝達を正常に近い状態に調整し、SNRI はセロトニン系ならびにノルアドレナリン系の神経の両方に作用して、セロトニンやノルアドレナリンを正常に近い状態に調整します。これらは吐き気や眠気といった副作用が一時的に出る場合もありますが、三環系・四環系のお薬と比較し、セロトニンやノルアドレナリンにより限定的に作用するお薬であるため、副作用は少ないと言われています。●その他として (リフレックス、デジレル)

うつ病の治療に使用されるこれらのお薬は、服用を始めてから効果が現れるまでには1~2週間ほどの時間が必要です。お薬の服用を始めてから患者さんの状態に合わせてお薬の種類や量を加減していくため、最終的にお薬が効いているかどうかを判断するには4~6週間ほどの時間がかかると言われています。また、お薬の飲み忘れや、自己判断による服薬の中止によって、不快な耳鳴り、めまい、顔面にしびれやピリピリ感が現れることがあります。

症状が良くなってくると患者さんによってはお薬を服用する回数を減らしたり、服用することをやめてしまったりする場合があります。このような自己判断はうつ病自体を悪化させたり、症状を長引かせたりする可能性があります。うつ病は再発、慢性化しやすい病気のため、症状が良くなっても医師の指示に従ってお薬を服用することが大切です。お薬のことでご不明な点やご不安な点がある場合には、医師又は薬剤師までご相談ください。

